

口腔機能の客観的評価としての舌圧測定：その意義，開発から展望まで

松山美和

Tongue pressure examination; an objective assessment of oral function

Miwa Matsuyama, DDS, PhD

補綴歯科の目的のひとつは咀嚼，嚥下，構音などの口腔機能の維持・回復・改善である。治療効果を客観的データとして提示し補綴歯科診療の重要性を科学的に証明し，さらにそれを情報発信して，国民の健康長寿に貢献するものである。口腔機能の中でも「食べる」機能はQoLに繋がる重要因子であり，それを担う舌の運動機能は咀嚼のみならず嚥下機能のひとつの原動力である。しかし，舌の運動様相は複雑であり，直接観察による定量評価は困難である。この舌運動の客観的評価パラメータのひとつに舌圧があり，舌の筋力や舌と口蓋との接触様相を評価する。舌圧測定の臨床応用は，機能評価や目標設定，治療やリハビリテーションの効果判定，再評価などを定量化・具体化できるため，広く普及させるべきと考える。

そこで，平成27年5月に大宮市にて開催された第124回学術大会において，「口腔機能の客観的評価としての舌圧測定：その意義，開発から展望まで」と題して臨床スキルアップセミナーが開催された。このセミナーでは，早くから舌の運動機能として舌圧に着目し研究を進めてこられた専門家の小野高裕教授（新潟大）と津賀一弘教授（広島大）にご講演いただいた。そして，舌圧測定に関する基本情報と最新知見を得て，われわれが今後さらに貢献すべき高齢者や障がい者の口腔機能向上について討議を行い，明確な目標と具体的方策として以下を提言した。

- 補綴歯科の形態（器質）至上から口腔機能を含めた観点へのシフト
- 病態に基づいた治療体系の確立
- 舌・口唇・頬からの口腔機能の評価

- リハビリテーションや口腔保健指導を含めた補綴歯科治療

- 歯科医療検査方法の確立と保険収載
- 国民への補綴歯科の意義と必要性の情報発信

さらに本特集では，両講師にこのセミナーの講演内容を基に総説をご執筆いただいた。小野先生は「咀嚼・嚥下における舌圧の意味と可能性」の中で，嚥下時舌圧や咀嚼時舌圧の基本パターンをご提示され，定量的データの蓄積は臨床イノベーションの原動力となり，「病態による治療体系」の確立に必要であるとまとめられている。津賀先生は「高齢者の口腔機能管理学分野向上への舌圧検査の応用」にて，舌圧検査の概要，舌圧検査に基づく新機能訓練，舌圧検査と訓練への期待について考察されている。

歯科医療の問題のひとつに，保険収載の検査が少ないことが挙げられる。補綴歯科学では以前よりさまざまな客観的機能検査法を開発してきたが，ほとんどは保険導入には至っていない。口腔機能の客観的評価として舌圧計測が可能になったことの意義は大きい。しかし，それはゴールではなく，次のステップのスタートである。口腔機能の客観的評価としての舌圧測定は，さらに多くのデータを広くから集積して解析し，歯科医療における検査方法としての有用性を情報発信し，保険導入されることで，さらに多くの国民の健康に貢献できる。124回学術大会のメインテーマは「補綴歯科から発信する医療イノベーション」だったが，舌圧測定をひとつの代表例として口腔機能検査の保険導入をも目標に据えて，今後どう展開させていくかが，日本補綴歯科学会の課題のひとつであろう。